

枕之事

一塗まぐら或は蒔繪いつかけ等物すき次第

但し蒔繪には銘之内にて繪柄能を用ゆ

扇之事

一金銀の扇に極彩色にて山櫻あるひは紅葉等銘の内にて繪柄能を書べし骨は十二軒黒塗蒔繪毛ぼり等をもちゆ要は金銀たるべし

字之事

一十二字但文錢錦金入等之きれに包金紙か銀紙にてうら打をして包べし金銀の水引にて是を結枕の上に乗せ置也

但し十二字の形になまりにて作り用ゆべし

〔投扇式〕禮式傳

通寶十二字を銀紙五寸四方にたちて包み蝶の形に似せて玉簾の水引にて結ぶべし十二字は月の數に表す是を的玉と云なり

但即席には有合の紙にて包べし本式の時は本文のごとし

扇は十二骨の俗扇を用ゆべし地紙は淺黄色にして金銀にて散紅葉を模様とすべし

但即席は前に同じ

枕は常の木枕の寸法なり是にも散る紅葉の蒔繪なり或は梨子地黒ぬり等也是を的臺といふ

但即席は前に同じ

敷物は猩々非羅紗或は毛氈等也幅は扇丈にたち切て用ゆべし是を投席といふ

但即席は前に同じ